

研究の動向

女学校創設期の服飾資料の保管の現状

日本家政学会服飾史・服飾美学部会

好田 由佳・難波 知子・藤本 純子
田中 淑江・水野 夏子・森 理恵

1. はじめに

近代日本の女学校創設期の貴重資料は、現在、女学校をその母体の一部として継承している高等学校や大学で保存・公開が図られているものの、今後は、保管場所や人材の問題で貴重な資料が消滅していくことも危惧されている。そこで、日本家政学会服飾史・服飾美学部会では、特別シリーズ企画として、「女学校創設期における服飾に関する貴重資料保管の現状調査とその情報分析・発信」に取り組むこととした。現在、全国各地の女子大学が保管している高等女学校創設期の貴重資料の現状を調査し、その現存する貴重な資料を大学HP、学会誌や部会報に掲載することで、少しでも女学校創設期の服飾資料を後世に伝えることを目的としている。

まず、第一段階の取り組みとして、文化遺産ともいえる女学校創設期の服飾資料が各女子大学でどのような状態にあるかを、その沿革とともに大学ごとに順次報告し

好田 由佳 Yuka KODA

梅花女子大学文化表現学部情報メディア学科 教授
〔著者紹介〕（略歴）京都女子大学大学院家政学研究科修了。博士（学術）

難波 知子 Tomoko NAMBA

お茶の水女子大学基幹研究院人文科学系 准教授
〔著者紹介〕（略歴）お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了。博士（学術）

藤本 純子 Junko FUJIMOTO

同志社女子大学生生活科学部人間生活学科 准教授
〔著者紹介〕（略歴）京都女子大学大学院家政学研究科博士後期課程修了。博士（学術）

田中 淑江 Yoshie TANAKA

共立女子大学家政学部被服学科 教授
〔著者紹介〕（略歴）日本女子大学大学院博士後期課程人間生活学科生活環境学専攻修了。博士（学術）

水野 夏子 Natsuko MIZUNO

大阪樟蔭女子大学学芸学部化粧ファッション学科 講師
〔著者紹介〕（略歴）奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了。博士（学術）

森 理恵 Rie MORI

日本女子大学 教授
〔著者紹介〕（略歴）京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。博士（学術）

ていくこととした。以下創立年順とする。（好田由佳）

2. お茶の水女子大学

(1) お茶の水女子大学（1875年創立）

1) 沿革

お茶の水女子大学は、女性教員の養成を目的として設立された官立の東京女子師範学校に始まる。東京・御茶ノ水（文京区湯島）に1875（明治8）年に開校した。当初は小学校の教員養成が目指されたが、男子の東京師範学校との合併（1885年）、高等師範学校への昇格（1886年）、女子高等師範学校の分離・独立（1890年）を経て、女子師範学校、高等女学校、小学校の教員および幼稚園の保母を養成する課程・カリキュラムが整えられていく^{*1,1)}。1899年からは、文科・理科・技芸科の三分科制となる。1910年に奈良女子高等師範学校が設立されたことに伴い、校名を東京女子高等師範学校に改称し、終戦後の1949（昭和24）年に新制大学としてお茶の水女子大学が発足した。なお、校地は関東大震災により焼失し、文京区大塚に移り、現在に至る。

2) 現存する服飾資料

東京女子師範学校時代からの各種資料は、2006年に設置された歴史資料館において、収集・保存、調査・研究が行われている。服飾に関する資料は、歴代の女子学生の服装が窺えるものと本学で行なわれた裁縫教育に関するものとに分けられる。

前者については、服装規程が窺える文書や記録類、当時の学生の姿が写った写真類、徽章類、実物資料などがあげられる。特に卒業写真および卒業記念写真帖（アルバム）は、全てデジタル化され、大学図書館のHPで公開されている²⁾。卒業写真には、1878（明治11）年から1952（昭和27）年までの本学卒業生の服装の変遷が確認できる。男袴から着流し、洋装（パッスル・スタイル）から再び着流しとなり、女袴の着用を経て洋服に移り変わっていく。その他、創立時の師範学校生徒たちに支給された徽章の簪、その後の男子師範と合併していた時の

「範」の字をかたどった徽章，1913（大正2）年に制定された桜の徽章，戦後制定されたお茶の花の徽章など各時期の徽章類も所蔵されている。服飾の実物資料には，本学の体操教員であった井口阿くりが1905年頃に提案したセーラー型の体操服がある（図1）。本資料自体は1916年に入学した学生からの寄贈品であるが，形状は明治期の体操服と一致する（図2）。先に述べた通り，本学は関東大震災により校舎を焼失しており，明治期から大正期にかけての資料は少ない。そうした中で本資料は関東大震災以前の体操服の実像を伝えてくれる貴重なものである。



図1 セーラー型体操服（お茶の水女子大学所蔵）



図2 スウェーデン体操をする女子学生（1911年）
（お茶の水女子大学所蔵）



図3 掛軸「東京女子高等師範学校附属高等女学校生徒服装の変遷」（坂内青嵐，1934年）
（お茶の水女子大学所蔵）

る。

もう一つの裁縫教育に関する資料については，和服・洋服製作のための掛図類，ミシンやアイロンなどの道具類，編物や袋物などの見本類，織物標本，被服標本（韓国・中国・台湾の服飾品，婦人標準服，野良着など），日本の歴史装束の雛形および人形，当時の学生のレポートなどがある。これらは主に関東大震災以降，本学に所蔵されたものである。日本の歴史や東アジアの服飾なども参考にしながら，裁縫や衣生活に関する研究・教育が行われたことが窺える。

3) 課題

本学の服飾資料をめぐる課題の一つは，現状を把握できる目録の整備が進んでいないことである。2001年に大学資料目録が作成されたが，学内に散らばる資料を網羅できておらず，また現在までに寄贈を受けた資料については追加されていない。今後，資料を有効活用していくためには，目録のさらなる整備が必要である。

(2) お茶の水女子大学附属高等学校（1882年創立）

1) 沿革

お茶の水女子大学附属高等学校は，1882（明治15）年に東京女子師範学校附属高等女学校として開校した。1899年の高等女学校令の公布に先駆けて設立されており，普通教育を行う女子中等教育機関の嚆矢，模範とされた。高等女学校では良妻賢母の育成が目指され，普通教科の他に，裁縫や家事など男子の中学校にはない女子向けの科目が加えられた。

2) 現存する服飾資料

本学の服飾資料も大学と同様，歴代の女子学生の服装が窺えるものと本学で行なわれた裁縫教育に関するものとに分けられる。前者において特筆すべきは，本学生徒の制服変遷を描いた日本画の掛軸が所蔵されていることである（図3）。これは1934（昭和9）年に創立50周年を記念して制作され，日本画家の坂内青嵐が描いたものである。当時，坂内の娘が本学に在籍しており，その娘をモデルに描いたといわれている。掛軸は8幅あり，それぞれ「明治18年～31年頃の式服」「明治25年頃の通学服」「明治30年頃の通学服」「明治35年頃の通学服」「大正元年

頃の通学服」「大正10年頃の通学服」「昭和7年の通学服（セーラー服）」「昭和7年の通学服（ジャンパースカート）」と題され、ほぼ等身大のサイズで描かれている。本資料はお茶の水女子大学附属高等学校に所蔵されているが、デジタル化され、お茶の水女子大学の附属図書館HPで公開されている³⁾。この他に、1885（明治18）年以降の卒業写真と大正期以降の入学写真が所蔵され、デジタル化済みだが、公開はされていない。裁縫教育に関する資料には、アイロンやこて、織物標本、染色関連品（絞り器、染料、図案など）、被服見本（羽織、袷長着、子ども服など）、袷長着やブラウスなどの部分縫い見本がある。

3) 課題

本学の服飾資料をめぐる課題は、歴史的資料をいかに保管・活用していくかである。附属高女時代の資料は附属高校に所蔵されているものが多く、大学のような歴史資料館の設備や専門的な職員はいない。上述の掛軸や写真類に関してはデジタル化が進められているが、今後さらに連携を図りながら、資料の保管・活用方法を模索していく必要があるように思われる。（難波知子）

3. 同志社女子大学（1876年創立）

（1）沿革

同志社女子大学の始まりは、1876（明治9）年に京都御苑内の旧柳原邸内において、同志社の創設者である新島襄、妻・八重、米国人宣教師 A. J. スタークウェザー（Alice Jannette Starkweather）らによって開かれた女子塾である。開学当初の生徒数は12名であった。1877年4月には、新島襄を校長として京都府勸業課の正式な認可を受け、同志社分校女紅場を開設する。しかし、綴字、正音、作文、文法、算術、地理、理学大意、万国史、修身学、裁縫、日本学の学科目に関して、婦女子の勸業授産を要とする女紅場の名称にふさわしくないとの申立があり、同年9月に同志社女学校と改称する。翌1878年には、今出川通の二条邸趾に新築した校舎（図4）へ移転するが、その費用をはじめ創設期の運営は、アメリカン・ボード（ウーマンズ・ボード）の援助によるところが大きい。1882年6月には第1回の卒業生5名を輩出した（図5）。全員がクリスチャンであったという⁴⁾。

（2）創設期における貴重資料

創設期の服飾関連資料としては、写真、文書、実物資料がある。現在、同志社女子大学史料センターにおいて、それらの収集・整理・保管・運用・公開に取り組んでいる。写真資料のうち、教員と生徒の集合写真では、洋装、和装、および年度による服装の変遷を見ることができる。図6の第7回卒業式の際の写真には、洋装姿の新島襄



図4 同志社女学校校舎
（同志社社史資料センター所蔵）



図5 第一回卒業生の写真（1882年）
（同志社社史資料センター所蔵）



図6 第7回女学校卒業式の写真（1889年）
（同志社女子大学史料センター所蔵）

（後列中央）ら男性と米国人教師（両端）、和装姿の新島八重（後列右）および女子生徒が並んでいる。

初期の写真では制服の着用を確認することは難しいが、1924（大正13）年4月より「洋式学生服を着用の事決定」となり、セーラー服タイプを含む三様の雛形が示される⁵⁾。雛形の解説には「是迄御着用のものあらばそれにて差支ありません」と併記され、また回想録に「殆どの

生徒がセーラー服を着るようになった。しかし、戦争が終ってからは又、元の自由服に戻ってしまった⁶⁾とあるように、制服着用の規定は緩やかで短期間のものであったようである。制服を設けない自由な服装の校風は、現在の中学・高校・大学へと受け継がれている。

(3) 現存する遺品

実物資料は非常に少ないが、H. F. パーミリー (Harriet Frances Parmelee) の遺品として、図7のような縦7 cm×横15 cm程度の編みかけのタッチ・レースやボビン、小鋏、下絵付きの布地、レース衿等がある。H. F. パーミリーは1880 (明治13) 年より2年間、英語、英文学、体操、編み物を教えたとされる。「日本に於いてレース編を最初に教えられたのは先生ではなかったか⁷⁾」ともいわれているが、これらの資料が同志社女学校で用いられたものであったかどうかは明らかではない。H. F. パーミリーが1933年に亡くなるまでの晩年を共に暮らした宮川家より寄贈された遺品は、詳細が不明であるが、明治から昭和初期の服飾や手芸を示す貴重な資料である。(藤本純子)

4. 梅花女子大学 (1878年創立)

(1) 沿革

1878年 (明治11年) に、澤山保羅、協力者成瀬仁蔵ほか教会信徒有志らにより、キリスト教主義を建学の精神とする梅花女学校が大阪・土佐堀裏町10番地に開校された。海外からの宣教師団によるミッション・スクールではなく、日本人教会と生徒の学費で運営された国内初の自給の女学校である。保羅が牧師をつとめた浪花公会とその母教会である梅本町公会 (現・大阪教会) の教会員の協力があったことから「梅花」と名付けられた⁸⁾。

創設期の教育内容は、邦語 (文章)、英學 (翻譯文典)、數學 (代數)、理學 (生理、物理、化學)、史學 (文明史)、修身、音樂 (唱歌)、講談 (談話)、體操、裁縫、地学 (地質學) 生學 (植物學) 星學 (天文學) 理財 (寶氏經濟學)、家政 (家政要史) (明治16年の文部省第十一年報より) と記録に残っている。なかでも洋裁 (フィラー担当)、和裁、音樂 (レビット担当) において優れた内容を教授していたとされている。学生のアルバイトも受け入れられており、手芸等によってできあがった作品をアメリカの教会のバザーで売ってもらい、その収益を苦学生の奨学金にしようとするものであったという⁹⁾。

図8は開講当時の土佐堀校舎の写真である。右端には梅花女学校の創設に協力した洋装姿の宣教師が立っている。図9は、1882年の梅花女学校第一回卒業生の着物姿の記念写真である。日本に女学校が創設されはじめた時期の女学生たちはエリート女性であったともいえる。

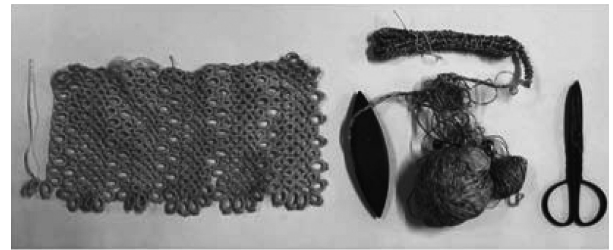


図7 H. F. パーミリーの遺品 (タッチ・レース, ボビン, 小鋏)
(同志社女子大学史料センター所蔵)



図8 開校当時の土佐堀校舎 (1879年)



図9 梅花女学校第一回卒業生 (1882年)

(2) 創設期における貴重資料

ここでは、梅花女子大学が保管する服飾関連の貴重資料を紹介する。

梅花女学校のバスケットボールは、1890～1894年に校長を務めた成瀬仁蔵によって広められたとされている。現在の梅花学園のHPにおいて、1909年にバスケットボール対抗試合が現神戸女学院と実施された記念写真が公開されている (図10)。その写真では、梅花女学生は着物と袴を装い、左胸にアルファベットの「B」がアップリケとして施されている。それに加え、1900年頃に女学生に人気であった筒袖を採用していることがわかる。



図10 バスケットボールの対抗試合（1909年）



図11 テニスミックスダブルス対抗試合
梅花女学校×神戸女学院（1919年）

これは明らかに対抗試合のためのスポーツの装いで、梅花学園創設期において、スポーツウェアの萌芽である装いが女学生に着用されていたことがわかる。

また、大正期の写真（図11）では、着物と袴でテニスを楽しむ姿が認められる。大きなリボン、当時流行の女学生スタイルである。

女学校創設期において、キリスト教主義の女学校間では、スポーツをととした交流が行われていたことがこれらの写真より確認できる。

（3）服飾に関する貴重資料の保管の現状

梅花女子大学における貴重資料は、梅花女子大学資料室で保管されている。しかし、制服の寄贈物に関しては、かなり傷んだもののしか保管されていないのが現状である。写真資料に関しては、梅花女子大学ホームページ「学校法人梅花学園のあゆみ 1878～デジタルアーカイブス」で一部紹介されているが、服飾資料に特化した扱いはなされていない。

今後の課題として、制服の寄贈物を適切な状態で保管することが第一に挙げられる。また、貴重な過去の制服を研究資料として活用できるように、3D デジタルデータとしてライブラリ化することが必要である。（好田由佳）



図12 共立女子職業学校授業の様子
『風俗画報』193号（1899年）所載

5. 共立女子大学（1886年創立）

（1）沿革

1886（明治19）年に共立女子職業学校は34名の発起人により設立された。設立の目的は「女子に適応する諸職業を広く授け広く世の婦女子に実業を得しめんとする」と学校設置願に記載されている^{10）}。この記述から、本校は新しい時代を生きる女性に技術を身に付けさせ、自立を促がすために設立したことがわかる。草創期の教育内容は術科と学科に分かれていた。術科では裁縫、飾帽、編物、縫取（刺繍）、図画、押絵、造花、学科では読書、習字、算術、作文、家政、理科を学ぶことができた（図12）。実技には定評があり、本学学生の作品は皇室に天覧、嘉納といった名誉を受けた^{*2,11）}。更に全国の女学校を代表して万国博覧会に作品を出品し、数々の賞を受賞した^{*3,12）}。また生徒の製作品を販売し得た利益の一部を学生のために貯金し、卒業時に払い戻すことが制度化されていた^{13）}。

（2）草創期の本学学生の装い

本校創設期の学生の装いを卒業アルバムから調査すると、日本髪に着流し姿である（図13）。明治20年代後半でも教員や学生の様子は日本髪が多く、同様の姿である。学生回顧録には、ある学生が紫袴をつけてきたところ叱られ、一日だけの袴着装であったと記される。当時は風紀が厳しく誠実勤勉をモットウに訓育されていたので、華やかな装いをする者はいなかったようである。このことは本学『第11学年報告』『衣服』の項にも記されている。「当校は校規に記載する如く着実節約を旨とするが故に生徒の衣服の如きも務めて質素ならしめ少しく華奢に涉るやの疑あるものは直ちに諭して改めしむ故に当学年の如き生徒皆能く本校の主旨をし全く美服を着くる者なきに至れり」。続いて、1899（明治32）年に高等女学校令が制定され、各府県に高等女学校が設置されると制服として

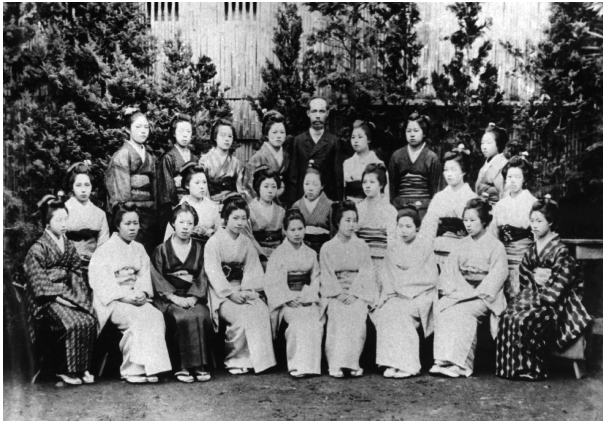


図13 乙科第1回卒業生 (1887年)



図14 第20回卒業生 (1906年) 袴姿初見



図15 寄宿生 (1909年)

袴が取り入れられ、袴着装は女学生の象徴となった。しかし、本学では袴を着装する者は無く、袴着装姿の初見は、1906年である(図14)。これ以降袴姿は定着した(図15)。このように本校の袴着用が後発であったことは、校風が堅実な女性を育成することであり、華美なことを嫌い厳しい規律を守らせたため、袴への移行が遅かったのではないかと考える。

(3) 現存する服飾遺品

本学には当時の学生の衣服類の資料は現存しない。し

たがってここでは、卒業生やその親族から寄贈された卒業生寄贈資料に着目する。現存の卒業生寄贈資料数は1,425点である。これらを分類すると以下の通りである。

1) 文書類(年報・学生個人成績簿・裁縫細目並びに成績・免状各種など)、2) 写真(アルバムなど)、3) 教科書、4) 裁縫雛形、5) その他製作物(刺繍・細工物など)、6) 製作道具類。最多の資料は4) 裁縫雛形で全体の約30%を占め、続いて5) その他製作物(刺繍・細工物など)16%、6) 製作道具類13%と続く。裁縫雛形は、裁縫に関して数多くの裁ち方や縫い方を効率よく習得するための教授法であり、実物の寸法ではなく雛形尺を用いて縮小した寸法で製作した和服や洋服、日用品などである。当時の各女学校の裁縫教育として取り入れられた教授法であった^{*4}。卒業生はこれらの作品を自身の傍らに大切に保管していた。現在裁縫関係資料は女学生時代の思い出であると共に、当時の女子裁縫教育を示す貴重な資料である。

(4) 今後の保存、活用方法

現状の貴重資料の保存状況は1) 文書類は中性紙の箱に保存され、2) 写真(アルバムなど)はデータ化された。また3) 教科書は図書館資料として順次デジタルアーカイブ化し、いずれ一般公開となる予定である。続いて4) 裁縫雛形、5) その他製作物(刺繍・細工物など)、6) 製作道具類は、筆者の研究室(被服平面造形研究室)で調査目録作りを進めている。

これらの資料は情報を広く公開する必要がある。本学の試みとして、2019年8月1日から10月31日まで図書館と筆者研究室が連携し、「共立女子職業学校卒業生寄贈品展示—女学生の宝物(共立資料室所蔵)—」を図書館にて開催した(図16, 17)。本学学生、教職員、高校生、家族が本学の歴史と伝統を知り、当時に想いを巡らす機会になったのではないかとと思われる。

今後、創設期当初の貴重資料は、経年劣化を避けることは難しいが、保存状態の改善の検討を試み、次世代へ情報を継承しなくてはならない。また調査データをまとめ、広く情報を公開し、被服教育の変遷や女子裁縫教育、女子教育の研究の発展に寄与することを目指す。(田中淑江)

6. 大阪樟蔭女子大学(1917年創立)

(1) 沿革と創設期の教育内容

大阪樟蔭女子大学の源流である樟蔭高等女学校は、1917(大正6)年、材木・海運業などで大きな成功を収め名を馳せていた森平蔵により、大阪に「完全なる私立高等女学校」を設立することを目指し開校された。創立者の森は、日本の将来のためには女子教育の機会を広げる

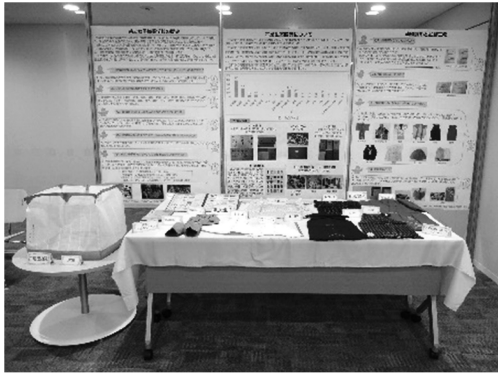


図16 学生作品や教科書



図17 学生作品や教科書

ことが重要と考え¹⁴⁾、当時の教育界の第一人者で女子教育家として有名であった伊賀駒吉郎を初代校長に迎え、「高い知性と豊かな情操を兼ね備えた社会に貢献できる女性の育成を目指す」という建学の精神を掲げ、自らが得た財力を社会へ還元すべく、巨額の私財を投じ現在の東大阪市・小阪の地で開学に至った(図18)。「樟蔭」の校名は、楠正成所縁の河内に校地を定めたことに因み、「樟(楠公)の余芳の蔭を偲ぶ」という意味で名付けられた。校章は楠氏の「菊水紋」に由来し、菊水をかたどっている。

大正デモクラシーの進展を背景とした「完全なる」樟蔭高女の具体的特徴は、定員数の多さと充実した施設・設備、一流の指導者の配置であった。進学志望者の入学難緩和にあたり、定員は大規模な800名(1学年200名)とし¹⁵⁾、普通の女学校の2～3倍という広大な校地に洋風建築の校舎を有し、生徒用の机・椅子、各種器具・機械類などはすべて特別詔えで、先進的な電気設備(自家発電機の据付や電気コンロ・アイロンなどの電熱器の完備)、視聴覚機器や18台ものミシンなどが整えられ、さらには大阪電気軌道(現・近畿日本鉄道)に通学専用列車を走らせた。また女子教育経験のある教師陣が集められ、家庭的できめ細やかな指導を展開し、“東洋一の女学校”と呼ばれるほど理想的で質の高い教育環境を備えた。

本科(4年制)と専攻科(2年制)で発足され、学科

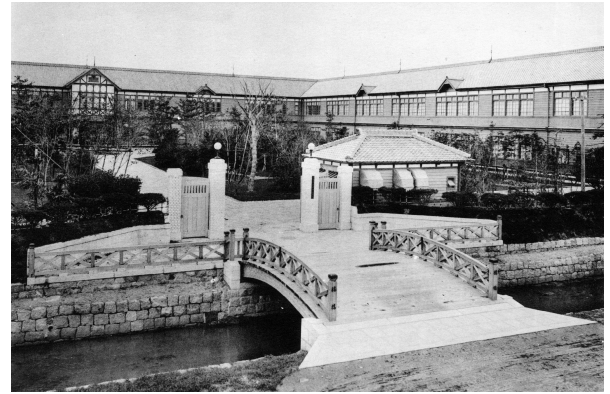


図18 創設当初の樟蔭(正門)
(樟蔭学園所蔵)



図19 ミシン教室での実習授業(大正末)
(樟蔭学園所蔵)

目は「修身」「国語」「英語」「歴史地理」「数学」「理科」「図画」「家事」「裁縫」「音楽」「体操」「手芸」「書道」「博物」など¹⁶⁾であった(図19)。また、逸早く視聴覚教育を採用したほか、実地教育を重視して校外授業(植物採集、観劇、展覧会見学、ホテルでのテーブルマナー研修など)を多く組み込んだ。

(2) 創設期の服飾資料と保管の現状

1) 文献・図像資料

樟蔭高女の創設期の装いを知る手がかりとなる文献・図像資料には、『私立樟蔭高等女学校記念帖』(1918年)をはじめとする周年記念誌、設立に関する各種資料、学報、『女子教育の革新』(1917年)などの伊賀駒吉郎著作物、樟蔭高女を取り上げた新聞記事、卒業生の証言に纏わる文書、卒業アルバムの写真などが挙げられる。

文献資料によれば、普段は筒袖の絹物を着用し、祝日には小大丸呉服店(心斎橋)へ別注文の、袂が長く、袖に菊水の模様入りの銘仙の五つ紋の黒紋付を着用して登校し、いずれにも深緑のカシミヤの袴(小大丸に注文)を用い、同色の靴下、革紐付きの短靴を履いた。袴につ

いては、創設当時、女学校の袴が海老茶や紺などが一般的である中、差別化をはかるため樟蔭を標榜する袴の色に深緑が選定された。これは、くすの木の緑¹⁷⁾から考案されたという。深緑の袴は「樟蔭色」として憧れの対象とされ、大阪の流行を風靡した¹⁸⁾。また画像資料からは、樟蔭生の着物と袴のコーディネート、袴の裾上げ（縫い上げ）や白線（樟蔭の場合は裾線に平行な1本の細い直線）の様子などが見て取れる（図20、21）。

これらの文献・画像資料は、創設期の樟蔭高女の服飾教育や樟蔭生の美意識をも紐解く資料といえる。戦災による焼失は無く、ほぼ全て残されており、目録の作成とデジタルアーカイブ化が進行中である。

2) 映像資料

本学には、1920（大正9）年から1932（昭和7）年までの樟蔭高女の学園風景を撮影した16ミリフィルム（20巻、4,000フィート）が保管されている¹⁹⁾。創設期の映像として、1920年の各科目の授業や専用電車での通学、朝会などの風景、また教室や設備、校内の敷地の様子などが収録されており、髪型を含む当時の樟蔭生の着物・袴

姿やその所作が確認できる。視聴覚教育に力を注いでいた樟蔭らしい資料である。また、フィルムの一部が放映されたNHK教育テレビの教養特集・映像の証言『大正の女学生』（1976年）という番組の映像では、創設期に在学していた樟蔭高女の卒業生らがスタジオで対談し、当時の学校生活の様相とともに装い（着物や袴）について語っている。現在、フィルムとNHKの映像は、DVD（『樟の葉蔭に』全11巻）として大学図書館に配架され、閲覧可能になっている。

3) 実物資料

実物資料では、大正時代の黒紋付と深緑の袴が現存している。黒紋付は五つ紋の銘仙で、袖には菊水の模様が入っており、深緑の袴は白線入りのカシミア製のものである（図22、23）。これらは寄贈品であり、前述した式典時などの制服（正装）としての装いである。

旧洗濯教室で、校内に残っている創設時を知る唯一の建物「樟古館」（国の登録有形文化財）は、創立100周年を機に、展示室として使用されている。実物資料である



図20 本科2回生（1923年卒）
（樟蔭学園所蔵）



図22 式典用の黒紋付と深緑の袴（1922～26年）
（樟蔭学園所蔵）



図21 入学時の本科4回生（1926年卒）
（樟蔭学園所蔵）



図23 袖に菊水の模様
(楠氏の菊水紋および校章と共通)

図22の黒紋付と深緑の袴は、開学以来の歴史を伝える「樟古館」の貴重な展示資料として活用されている。

(3) 創設期の服飾を“受け継ぐ”という「保管」—深緑の袴について

深緑の袴は、樟蔭女子専門学校でも制服に採用された。大学開設から今日に至っては主に卒業式で装われ、袴の深緑色はスクールカラー（学園の基本カラー）に設定されている。また、これまでに卒業生から寄贈された袴は160着にも及び、同窓会で保管されている。これら寄贈の袴は在校生が学園の関連行事で着用できるよう、年間を通して無料で貸出している。

創設から受け継がれている「樟蔭色」と称された深緑の袴は、樟蔭の歴史や伝統、樟蔭生との精神的結び付きを語るものであり、オリジナリティの所在として樟蔭の位置づけ（特徴）を示し、また教育面において高い帰属意識や在校生としての自覚を醸成する役割を担う服飾資料といえよう。（水野夏子）

7. おわりに

以上、5つの女子大学に保管および記録されている服飾資料を中心に、それぞれの沿革とともにまとめた。服飾史のみならず、教育史、女性史研究にとっても貴重な資料であることがご理解いただけたことと信じる。

同様の資料および記録は、他大学、または高等学校においても多数保管されていると考えられる。日本家政学会服飾史・服飾美学部会では、今後も現状調査を継続する予定である。会員の皆様におかれては、情報を同部会までお寄せいただければ幸いである。（森理恵）

脚 注

*1 師範学校生徒の教育実習のために、1876年に附属幼稚日本家政学会誌70-11に掲載されています

園、1877年に附属小学校、1882年に附属高等女学校が設立された。

- *2 1889（明治22）年4月に皇后の行啓があり、1991年より毎年皇室の天覧、および生徒の作品の嘉納が行われた。
- *3 1889年パリ万国博覧会、1893年シカゴ・コロンプス万国博覧会などに刺繍、造花作品を出品し、銀牌を受賞、この後も博覧会への出展は続く。
- *4 渡辺辰五郎（1844-1907）が考案した教授法である。渡辺は和裁技術の基礎を作り出した功績者。東京家政大学の前身である和洋裁縫伝習所創設者であり、共立女子職業学校の発起人の一人である。

文 献

- 1) お茶の水女子大学百年史刊行委員会。お茶の水女子大学百年史。1984。
- 2) お茶の水女子大学（2009）。“お茶の水女子大学デジタルアーカイブズ（卒業写真）”。http://archives.cf.ocha.ac.jp/shiryo_top.html（入手日：2019.8.5）。
- 3) お茶の水女子大学（2012）。“お茶の水女子大学デジタルアーカイブズ（美術工芸）”。http://archives.cf.ocha.ac.jp/shiryo_bijutsu.html（入手日：2019.8.5）。
- 4) 同志社女子大学125年編集委員会。同志社女子大学125年。2000。
- 5) 同志社女子部創立百周年記念誌編集委員会。同志社女子部の百年。1978。
- 6) 武間富貴。スモークツリー。同志社同窓会。1983, 38。
- 7) 宮川とも。“パミリー先生と私”。同志社女子大学ほか。同志社創立九十周年記念誌：1875-1965。同志社同窓会。1966, 37。
- 8) 梅花女子大学（2019）。“梅花女子大学沿革”。<https://www.baika.ac.jp/aboutus/history/>（入手日：2019.8.1）。
- 9) 堀田暁生。西口忠。大阪川口居留地の研究。思文閣出版。1995, 243-244。
- 10) 私立共立女子職業学校。共立女子職業学校設置願（明治19年8月）。東京都公文書館蔵。1886。
- 11) 私立共立女子職業学校。第八学年報告（明治26年9月～27年8月）。1894。
- 12) 共立女子学園百年史編集委員会。共立女子学園百年史。1986, 133-134, 144-147。
- 13) 私立共立女子職業学校。生徒貯金。第一学年報告（明治19年9月～20年8月。1887。
- 14) 学校法人樟蔭学園。学園要覧2019。2019, 1。
- 15) 大阪樟蔭女子大学。樟蔭の窓。2016, 18。
- 16) 樟蔭学園。学校法人樟蔭学園創立100周年記念誌。2018, 32。
- 17) 樟蔭学園。樟蔭学園創立50周年記念。1967, 11。
- 18) 大阪朝日新聞。連載「女学生の服装」。1928年5月2日。
- 19) 樟蔭学園。樟蔭学園80周年記念誌。1997, 33。